月曜ルポ

谷川岳に氷河はあった?!

上越国境の"魔の山"谷川岳（一、九六三㍍）に、かつて氷河が存在した証拠とみられるU字型の地形や氷河に運ばれたと思われる堆（たい）積物（モレーン）が続々と発見されている。研究者たちは今秋、上空から地形を再点検するほか、西ドイツなどの氷河学者に立ち会ってもらったうえ、結論を出す。氷河があったことが裏付けられると、これまで本州中部では、二千五百㍍以上の高山にしか氷河は存在しなかった、とする定説はくつがえされる。すでに関係者は氷河遺跡に間違いない、とみて天然記念物に指定して保護する動きをみせているが、肝心の地元の群馬県水上町では「魔の山のイメージを変えるような名所ができるのはありがたい。だが、天然記念物のおかげで、観光開発にストップがかけられでもしたら死活問題だ」と複雑な反応をみせている。

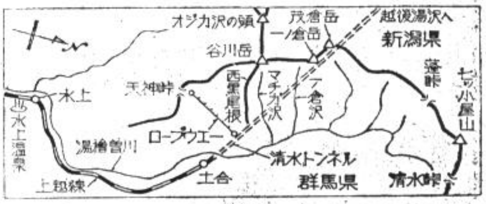
定説覆す"低地"の遺跡

天神平スキー場も

谷川岳の登山口、上越線土合駅前の高台に、高さ二㍍、幅六㍍の遭難者の碑が建っている。昭和六年の最初の遭難者をトップに年代順に名前が刻まれているが、すでにその数は六百四十人を突破している。この辺りは標高七〇〇㍍。そばに谷川岳ロープウエー駅があるが、意外にも駅そのものがモレーンの上にのっかっている、という。「実は私も驚いている。こんな低いところに氷河が流れていたとは……」と案内してくれた"谷川岳の主"中島喜代志さん(六五)も半信半疑の様子。「学者にいわせると、ロープウエーの終点の天神平スキー場は氷河地形のカール（圏谷）だそうだし、一ノ倉沢などの谷には、氷河でこすられた跡が残った巨岩がいくつもあるらしい」

谷川岳の氷河地形に注目している学者は十人近くいるが、最初に目をつけたのは、ヒマラヤなどの氷河を研究中の五百沢智也氏（四十五歳、元国土地理院技師）。昭和三十八年豪雪のとき、空と地上の両面調査で「氷河地形にほぼ間違いない」と確信した。欧州で氷河学を専攻した筑波大助手の小野有五氏(三二)らは五百沢氏の発見に刺激されて、四年前、山ごもり。おわんをタテ割りにしたような、いわゆるカール地形を一ノ倉沢の上部などで、いくつもみつけた。これをきっかけに、氷河学者の谷川もうでが盛んとなり、大御所の辻村太郎・東大名誉教授(八九)や田中薫・神戸大名誉教授(八〇)らもたびたび現地へ。調査はいまもつづけられているが、氷河時代の後期（約二万年前）の遺跡、という点で意見の一致をみている。

積もった雪が何年も解けないでたまっているうちに氷になり、じわじわと動き出したものが氷河である。わが国では、明治三十五年、山崎直方博士が北ア白馬岳にカールを発見して以来、これまでに北海道・日高山脈と日本アルプスで約七十カ所の氷河地形が明らかにされている。



やっと学者のメス

それにしても、谷川岳のように人里に近くて有名な山に、最近まで氷河学者のメスがはいらなかったのはなぜ？「スプーンでえぐったような岩壁をみて、おかしな地形だ、と思っていた人はかなりいたようだ。しかし余りにも高度が低すぎるので、谷川岳の場合、雪渓や雪崩による作用で特殊な地形ができた、と思いこみ、本気で調べる人がいなかったのではないか」と小野氏らはいう。

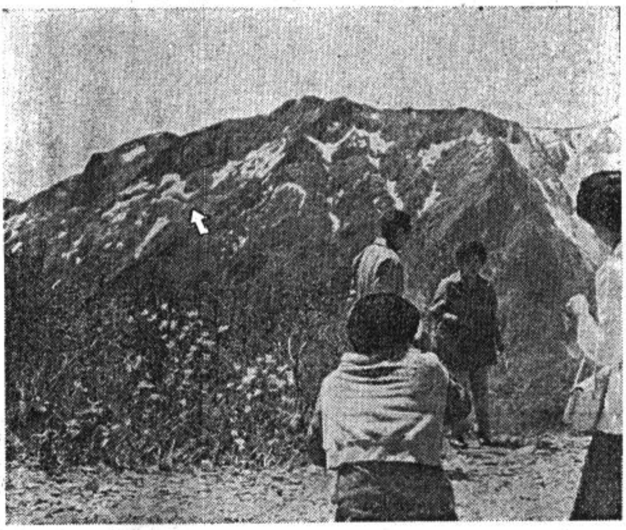
日本アルプスのカールは二五〇〇㍍以上、日高のカールは一六〇〇㍍以上のところに残っている。だから、その辺りがわが国の氷河時代の雪線（万年雪が生じるところ）と考えられていた。昭和のはじめ、小川琢治博士によって「海抜八〇〇㍍付近にも氷河は存在した」という低位置氷河説が唱えられた。これは、多くの学者に否定されたが、再び、この説が浮かびあがってきたともいえそう。

氷河にこすられた跡が残る巨岩を示す"谷川岳の主"中島喜代志さん＝谷川岳山ろくの800㍍地点で

これまで小野さんが確認したカールは一ノ倉、マチガ、西黒、芝倉の各沢の上部や谷川岳南面など約十カ所。「この付近は世界的な豪雪地帯です。しかも地形がけわしく雪崩の巣。沢にたまる雪も多く、五月ごろ一ノ倉沢では五〇㍍以上の積雪量を記録し、万年雪もみられる。だから、寒い時代に、氷河ができて、徐々に動き出し、上部にカールを、さらに下流にU字型の谷を刻んだのです」と小野氏は説明する。

来年、東京で国際地理学会が開かれる。その打ち合わせで、ことし十月上旬、ミュンヘン大のホイベルガー教授ら二人の氷河学者が来日する。日本側は二人に谷川岳の地形を鑑定してもらう予定だが、五百沢氏は「彼らはタイコ判を押すにきまっている」と自信たっぷり。

田中氏らは水上町の協力で、国際地理学会までに天然記念物の指定を受け、学会の"目玉"の一つにしようとしている。ところが、地元は決して喜んではいない。



氷河地形を代表するカール（矢印）が見られる谷川岳南面＝リフト終点の天神峠から

痛しかゆしの地元側

「近ごろの山男は氷河遺跡にハーケンを打ったり、ペンキを塗ったりしかねない。観光開発で台無しにされる恐れも十分ある。だから天然記念物にして、保護すべきだ」と主張しているのは、谷川岳生活半世紀の中島さん（水上山岳会長）ぐらい。町民の多くは天然記念物指定を恐れているフシがある。

観光に使いたいが

その背景にあるのは、水上温泉の伸び悩み。「温泉で食べている町なのに、泊まり客は年間百十五万人で横バイ。県内の草津温泉が伸びているのに、水上が不振なのは、草津のように、志賀高原や長野の善光寺に抜けるような観光通路をもたないからだ」と町当局や観光協会幹部はいう。そこで、現在、一ノ倉沢出合で行き止まりの国道291号を湯檜曽川べりまで延長し、土合駅へ抜ける周遊道路を計画している。「一ノ倉の大岩壁を売りものにしたくても、現状では話にならない。狭くて大型バスははいれないし、乗用車で見物にでかけても、出合で行き止まりだし……」と同町観光協会の大竹清・専務理事はこぼす。

業者の間には、「氷河遺跡をうまく観光に使いたい」との気持ちもあるようだが、それよりも「天然記念物に指定されたばかりに、開発がダメになったら一大事」という懸念が先立っている感じである。天然記念物の指定について、文化庁の品田穣調査官は「今秋がチャンスなのだが……。ただ、指定されたら開発行為はかなり制約を受けるだろう」とみる。地元が二の足を踏む理由もそこにある。

× ×

下界は真夏日というのに、谷川岳山頂から見渡す山々や谷には、まだ雪が残り、涼しい風を送ってくる。いかにも氷河遺跡らしいムード。しかし、ここに、氷河地形として、北ア立山、燕岳に次いで、わが国三番目の天然記念物が誕生するまでには、多くの難題を解決しなくてはならないだろう。

（編集委員・武田　文男）

ぺんざら

読む辞書

本は読むものではない、むしろ引くものである、といったのはたしか大宅壮一氏だった。二年ほど前出版されたサイデンステッカー氏らの『日米口語辞典』は逆に読む辞書として評判になった。ことわざ、慣用句など米訳とその解説が読みものとして面白いからだ。

ところが、読む辞書の"大先輩"が日本にあった。明治二十五年初版の山田美妙編『日本大辞書』がそれだ。美妙といえば言文一致論者として有名で、みずから口語で小説も書いた。この辞書は美妙二十四、五歳の作。口述筆記によるものでもちろん文章は口語体、当時の東京語のアクセントを表示するなど、時代を先取りしている。

このほど出た千数百ページの復刻版を拾い読みしたが、興味はつきない。おそらくは大槻文彦編の『言海』を左手にしながらの編集と思われ、舌鋒（ぜっぽう）するどく『言海』に挑戦している。たとえば「あつぼったい」ということばを二十八行にわたって解説、また「あかぬける」ということばの語源については「あくぬける」をとっているのも説得力がある。ところどころで「と思うがどうか」といった表現もあり、普通の辞書にない冗舌がたのしい。「いてる」と「こほる」、「一円」と「一面」、「改正」と「改良」などの類語の解明に作家としてのするどい語感があらわれているのも魅力だ。

筆者は二十数年前、やはり千数百ページの『経済学辞典』を拾い読みしているうち、興味にまかせて全巻読み終えてしまった。「字引読むバカ、引かぬバカ」などと友人に冷やかされた思い出があるが、この読むバカ、いまにして楽しい。

（仏）